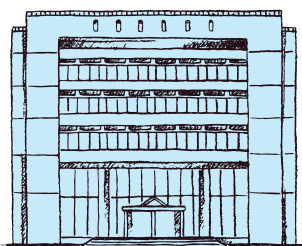


西南学院大学

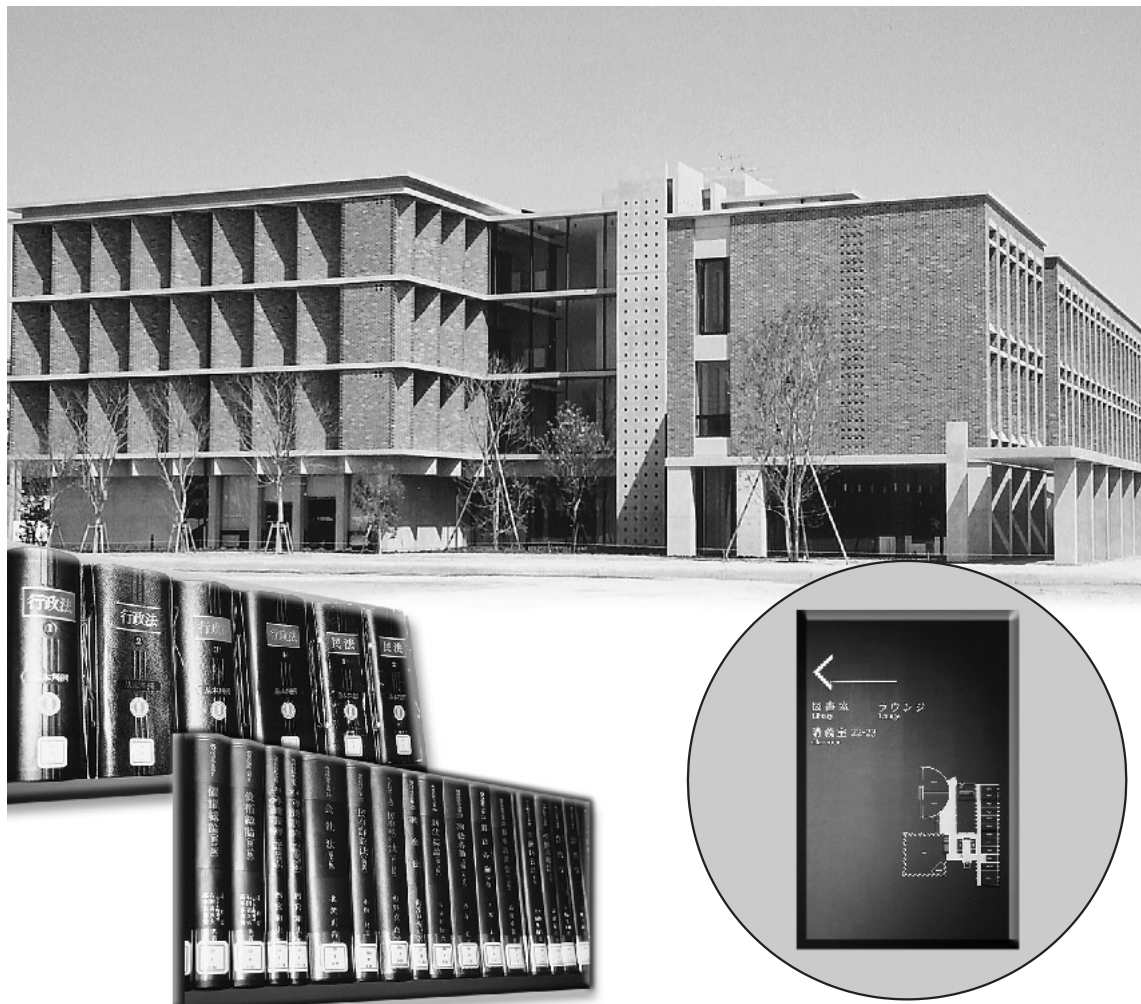


図書館報

No.

156

2004.5



法科大学院棟に図書館分館も入り、
4月からオープンしている。

目次

- 新入学生の皆さんへ 図書館長 伊藤 龍峰 2
本を読むこと 元文学部教授 西嶋 幸右 3

特色ある図書館コーナー

- リンディスファーン福音書 4
Extensive-Readings コーナー 5

本学教員による図書館活用法

- 「図書館のネズミ」と「独学者」 文学部教授 西村 牧夫 6

図書館のロビンソン

- 文学部教授 岩尾龍太郎 6
経済小説にみる経済人の生き様 経済学部助教授 小松 秀和 6
私の学生時代の読書体験 法学部教授 神宮 典夫 7
お知らせ・編集後記 8



新入学生の皆さんへ

—新しい出会いのために—

図書館長 伊藤 龍峰

新入生の皆さん、入学おめでとうございます。皆さんがこの図書館報を手にするのは、ゴールデン・ウィークも終わり、本当の意味での大学生活に足を踏み入れた時期ではないかと思います。この頃になると、キャンパスも新年度開始に特有のざわめきから、ようやく静けさを取り戻すとともに、皆さん方も入学当初に感じていた緊張や戸惑いもずいぶんと和らぎ、今、自分が置かれている周囲のことについて、落ち着いて見渡すことができるようになったのではないかと思います。

言い古された言葉ではありますが、時の経過とは本当に早いものです。うかうかしていたら大学生活はアッという間に過ぎてしまいます。この時期だからこそ、自分のこれからのことについて、じっくりと考えることも大事なのではないのでしょうか。できれば、その際には、是非とも大学生活と図書館との関わりについても考えてみてください。図書館の活用が、きっと皆さん方の大学生活に彩を添えるものになるはずです。図書館の具体的な利用方法については、図書館入口ゲートの横に置かれている「西南学院大学図書館2004ガイドブック」をご覧ください。ここでは、図書館の活用を通して得られる楽しみについて記してみることになります。

私たちには、至る処に出会いはあります。そして、出会いのほとんどは、突然にやってくるようです。時間や場所に関わりなく、私たちの目の前に衝撃的に現れることになるのです。そのため出会いは、多くの場合、直感的であるということがができるでしょう。何が「これだ!」なのか、あるいは、どうして「これだ!」なのかについては、出会った時点では明確な説明ができないのです。その時はただ、閃きだけで出会いを感じるようになるのです。

出会う対象も千差万別です。しかも、その対象は、目に見えるものばかりではなく、目には見えないけれども心の内側で感じるものもあります。たとえば、人であったり、情景であったり、神で

あったり、一条の真理であったり、そして書物であったりするわけです。ただ、出会いは唐突ではあるけれども、私たちの心に相応の準備や一生懸命さみたいなものがなければいけません。求める心の準備がなければ、出会ったことにさえ気付かないまま、求めている対象が遠ざかってしまうことになります。常に、心の準備さえしていれば、たとえ、それが何であるのか判からなくても、またどのように求めてよいのか判からなくても、喘いだり、苦悩したりしているうちに、ある日、ある時、ひょっこりと求める対象が目の前に姿を現すのです。出会いとは、どうもこのような構造を持っていると思われます。大学生活でどんな出会いをするのか、それを想像してみるだけでも期待に心が躍るようです。

新入生の皆さん方は、それぞれの夢を抱いて本学に入学して来られたことでしょう。これからこのキャンパスで過ごす4年間（あるいは、それ以上?）で、その夢を実現していただきたいと願っていますが、たとえ実現できなかった場合であっても、大学生活は、きっと皆さん方にとって人生の中の輝かしいエポックになるはずです。夢は、何らの努力もなしには実現できないことは言うまでもありませんし、また大学生活が人生のエポックになるかどうか、出会いを求め続けていたかどうかに関わってきます。皆さん方の夢の実現のために、そしてエポックを形成する思い出の一つとして、図書館が少しでもお手伝いすることができれば、それに越したことはありません。私たち図書館関係者が望外の幸せを感じる瞬間です。

図書館は、いつでも皆さんの前に開かれています。図書館に出かけて実際に書物を手にとって読んでみようとする人の心にだけ、「あなたの書物」に出会うための「鍵」がそっと渡されるのかも知れません。本学の図書館には、「鍵」を渡されるに値する書物が、あなたとの出会いをじっと待っています。皆さん方一人ひとりが、ここで「あなたの書物」に出会うことを願ってやみません。



本を読むこと

—または図書館の思い出—

元文学部教授 西嶋 幸右

本を読むことは、楽しいことである。論文執筆などの差し迫った目的のためではなく、自分自身の関心と気分に応じて本を選び、ゆっくりとそれを読むことは最高に楽しいことである。

1933年生まれの私にとって、子供の頃には本を読む機会はほとんど無かった。戦時下の日本では、個人の思想や信条はもとより、教育的・文化的な出版事業は極端に統制されていたからである。加えて戦争の末期には、灯火管制が一段と厳しくなったため、夜間に読書を楽しむなど、到底出来ることではなかった。

1945年8月、この忌まわしい戦争が終わった時、私は小学6年生だった。日本は敗けたが、それでも私たち子供にとっては、それは嬉しいことだった。まず、夜が来ても明るい電灯の下で、何の気兼ねもなく一家団欒で過ごすことが出来るようになったからだ。でも、いくら本を読みたいと思っても、家にも学校にも書店にさえも、子供向けの本はほとんど無かった。

翌年4月、熊本の済々黌という（旧制）中学に入学した。さすがに小学校と違って、この県立の中学校には図書館というものがあつた。だが、その本棚に並べられていたのは、ほとんど戦前に出版された古い本ばかりで、とても読んでみたいという気にはなれなかった。とにかく、戦後まだ半年余りしか経っていなかったのだから、それはやむを得ないことでもあつた。

それでも夏休みに入る直前に、私はその図書館から1冊の本を借り出した。それは1927（昭和2）年に春秋社から出版された《世界大思想全集》第10巻のルソー著『エミール』（平林初之輔訳）という約680頁にも及ぶ分厚い本だった。しかし、その内容も訳文も、中学1年生には少々難しすぎた。最初の20頁も読んだらうか。その後、名著『エミール』は机の上に放置されたまま、私の長い夏休みは終わった。しかし、このルソーという思想家が、のちに私の研究に深い係わりをもつことになろうとは、当時は夢にも思わなかった。

中学・高校時代は、総じて読書らしい読書はできなかった。というのは、私自身がスポーツに熱中していたからだ。中学では主として野球に、高校に進学後はテニスに熱を上げ、おまけに全国大会などに出場するようになると、落ち着いた気持ちで読書をするのは難しくなった。だから本格的に読書ができるようになったのは、大学生になってからである。大学に入ると、私はそれまでのスポーツは一切やめて、講義の無い日は朝から図書館に籠もって、親しく本と遊ぶことにした。まず手始めに『漱石全集』（岩波書店）の全20巻

を、小説をはじめ文学評論や日記・書簡に至るまで、隅から隅まで丹念に読み上げた。また『内村鑑三著作集』の全巻を読み終えて深い感動を覚えたのも、そのころの楽しい思い出である。いま考えてみれば、そのような人々の思想を当時どれだけ深く理解できたかは甚だ疑問であるが、しかし、ひとりの人間を理解するために、その人のすべての作品を読み通すことが、きわめて有効な方法であることを学んだ。

その後、西洋（主としてフランス）の歴史の研究を仕事とすることになった私は、多くの図書館のお世話になった。ルソーの自然法思想に関する修士論文を準備していた頃、九州大学の（旧）中央図書館の暗い書庫で、18世紀初頭に出版されたグロティウスやプーフENDORFの（バルベラック訳による）フランス語版を見つけて欣喜雀躍したのも忘れられない。

しかし何と言っても、1970年代の始め、パリ大学留学中にお世話になったフランスの国立図書館（Bibliothèque Nationale）は格別である。ここの入館者は、決して若い人達だけではない。その顔触れは、まさに老若男女、人種も国籍もさまざまである。ただひとつ共通していることは、その真剣な眼差し。だから、どんなに満席になっても騒々しくなることはなく、室内は静寂そのもの。また、司書（bibliothécaire）とよばれる人達も、研究テーマに必要な図書・文献に関する情報を実に丁寧に教えてくれる。そのような徹底したサービスを実際に体験しながら、図書館先進国フランスの積極的な文化重視のシステムに強い感銘を受けたことが、今も懐かしく思い出される。

ところで私たちは、すでに亡くなった歴史上の偉人たちには直接会うことはできないが、その人たちが書き残した本を読むことによって、その思想に直接触れ、その意見や考え方を学ぶことができる。だから、ゆっくりと時間をかけて著作を精読し思考することによって、その著者たちと親しく《対話を楽しむ》ことができるのである。《本》は、私達にこのような無上の喜びをもたらしてくれる宝物である。

西南学院大学の図書館は、その優れた設備とともに、豊富な蔵書によって、無数の宝を収めた《宝物庫》である。願わくは、諸君が自らこの宝物庫の中に積極的に足を踏み入れ、そこで真の価値ある宝を探索して頂きたい。まして、この宝の山を前にして素通りするなど、ほんとに勿体ないことである。人生は、とくに貴重な青春の若き日々は、のんびりと無為に過ごして浪費できるほど、そんなに安価なものではない。

特色ある図

古典英語研究の原点

リンディスファーン福音書

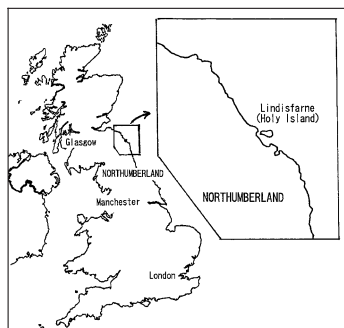
キリスト教資料展示コーナーに展示中

《リンディスファーンとは》

図書館では、2003年度に、世界最古の福音書英訳書として有名なリンディスファーン福音書のファクシミリ版を受け入れました。

リンディスファーンはイギリス中部の東海岸に位置する小さな島で、現在はホリーアイランド（Holy Island 聖なる島）と呼ばれています。この島とノーサンバーランド（英国本島）は、1日に2回、干潮のときに約5kmほどの砂も道ができ、そのような本土との隔たりが宗教的、神秘的な印象を人々に与えたのでしょう。

この島の僧院カスバートは西暦687年に没しますが、彼の業績をたたえて、司教エアドフレスがこの福音書の原書となるものを制作したという記録が残されています。



エアドフレスは司教でありながら、写字家・装飾デザイナーとしても、天才的な才能を発揮していたといわれています。そのエアドフレスが西暦698年（710年以降という説もある）、カスバートの墓所に奉納するために作ったのが、このリンディスファーン福音書です。英国中世の写本として、「ケルズの書」「ダロウの書」とともにケルトの三大彩飾写本といわれています。

《カスバートの功績》

リンディスファーンに修道院が建てられたのは635年で、当時スコットランドはアングロサクソンの諸王国が覇権を争っており、そのときにノーサンブリア（英国中部）の王オスワルドの招きでやってきた牧師エイダンの熱心な布教活動のかいがあってリンディスファーンはノーサンブリアのキリスト教化の中心として栄えたのでした。

しかし、この後アイルランド教会派とローマ教会派の渦中で、リンディスファーン修道院は急速に荒廃していききました。そしてこの荒廃からリンディスファーン修道院を復活させたのがカスバートだったのです。ローマ教会との和睦をなし、王を始め民衆から絶大な信望を集めました。

カスバートの死去から11年後、彼の棺は新しい廟へ移されましたが、その時機に、このリンディスファーン福音書が完成したことになります。



大英図書館所蔵原本

《写本としての特色》

リンディスファーン福音書は、新約聖書のマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの四福音書の写本からなっています。四福音書の前に各福音書記者の肖像画が色鮮やかに施され装飾的、写実的な主張がなされていることがわかります。福音書の対観表は各16ページ。

美術資料としての観点からは、装飾モチーフにはケルト系らせん文、ゲルマン系動物組紐文、地中海系福音記者像等、多様な源泉が合流してできあがっていますが、本学は、これを、語学上の重要な観点から購入したのです。すなわち、本書はラテン語で書かれているのですが、その行間には、その後、リンディスファーン修道院の首席司祭アルドレドによって古典英語による逐語訳が書かれ、これが言語研究の原点として高い評価が与えられているからです。東京大学名誉教授寺澤芳雄氏は「最古の英訳による全文の逐語訳が行間に書き加えられている点で、その価値と魅力はひときわ高められている・・・英国における聖書翻訳の輝かしい伝統の第一歩を刻印するものであった。

リンディスファーン福音書の新しい覆刻・レプリカは、聖書学、キリスト教史、美術・工芸史、古写本学、中世史研究、ケルト研究さらに古典英語研究などに好個の研究資料となるのみならず、神秘的な美に包まれた標榜たる中世ケルト・アングロサクソン文化の世界にわれわれを誘ってやまないであろう。」と感動的な解説を残されています。

【大英博物館所蔵】

※リンディスファーン福音書（ファクシミリ版）

キリスト教資料展示コーナーにて展示中

【参考資料】

世界大百科事典（平凡社）

明治大学図書館紀要 7

「リンディスファーン福音書」（白井直美氏）

丸善パンフレット

（図書館事務次長 篠崎 珣）

書 館 コ ー ナ ー

**A Book is a Garden in your Pocket: Extensive Reading in English****by Ronan Brown**

Reading a good book in English is a pleasure that students might not expect to enjoy until they have reached an advanced level. But they would be wrong. The Extensive Reading (ER) Program on the 4th floor of the library contains a collection of graded readers and a set of full, unadapted texts that allow students at all levels to experience the satisfaction of reading comfortably in English.

Comprising 875 titles, of which there are multiple copies, the collection now holds 4,250 books in a variety of fiction genres spread across 8 levels of difficulty. By selecting and reading books at their current ability level, students have at their disposal an extremely versatile resource for developing reading fluency and enhancing overall language competence.

The ER Program has been used very successfully by English language and literature majors at Seinan to support and supplement classroom studies. It provides an ideal resource for extending contact with English outside of class. Moreover, reading widely provides further contextualization of language previously met in the classroom, thereby facilitating acquisition. ER also provides students with a positive individual learning experience. Such reading is a wonderful way for students to improve English enjoyably in their own time and at their own pace.

ER means reading widely and in quantity. It also means reading for global understanding, not reading intensively for detail. Having determined their personal, current reading level, i.e., when their book contains no more than 2 or 3 unknown words per page, students can easily attain an adequate reading speed of 125 words per minute or more.

Content and genre are just as important as level. Although adapted versions of literary classics such as *The Scarlet Letter*, *Rebecca* and *Anna Karenina* are still widely read, other more contemporary literary genres are becoming popular. Examples of these genres are: Business World with titles such as *Women in Business*, *Management Gurus* and *The Story of the Internet*; True Stories such as *Grace Darling*, *Cry*

Freedom and *The Double Helix*; Animal Stories such as *Ring of Bright Water*, *Island of Blue Dolphins* and *The Horse Whisperer*; and Crime & Mystery titles such as those written by John Grisham and Steven King. Other popular genres are Adventure, Romance, Thriller, Human Interest, Social Issues, Horror, Science Fiction, Fantasy and Biography. Thus, students have a wide selection to choose from.

Research into ER has repeatedly shown that there are considerable educational benefits. Studies have established gains in overall language development and vocabulary growth. There have been positive effects on motivation and reading confidence. Writing and spelling have similarly improved. There is also evidence of enhanced oral proficiency. Furthermore, by reading large amounts of easy language, students are better able to develop the smooth eye movements necessary for fluent reading.

In conclusion, it is worth reviewing some of the advantages of reading fiction in English. First, knowledge of the world presented in fiction is shared across cultures; everyone knows about romance, adventure, and crime because they are part of the human condition. Second, there is an infinite variety of settings, characters, plots, and themes, so no two stories are the same. Third, romances, comedies, and thrillers may provide a welcome change from the many non-fiction texts on the curriculum. Fourth, fiction discusses important contemporary issues, e.g., love, marriage, the environment, racial prejudice, moral integrity, etc.

Finally, the innate desire to discover what happens next is the perfect stimulus to read for meaning without concentrating on the text, thus allowing students to absorb the language unconsciously.



本学教員によ



「図書館のネズミ」と 「独学者」

文学部教授

西村 牧夫

フランス語に rat à bibliothèque 「図書館のネズミ」という表現がある。図書館にちょこちょこ出没して知識を詰め込むタイプを言うのであろう。これが私のあこがれの人物像であった。今では信じられない話だが、小さい頃の私は大の本好きだったのである。貸本屋から10円とか20円で何冊も本を借りてきて、布団の中で夜を徹して読んだものだ。「大きくなったら図書館で朝から晩まで読書をするんだ」

だが、続かないのが子供の夢…教科書さえも開かなくなり、高校では留年の憂き目を見た。

そんな私でも熱心に図書館を利用した時期がある。大学でフランス語を学び始めたからだ。当時、一般家庭では録画はおろか録音さえできなかったから、外国語学習と言えただひたすら読むだけ。しかし、読むといっても英語以外の本は入手しにくく、図書館で読むしかなかったのである。

辞書と翻訳の助けを借りながら最初に読み通したのはモーパッサンの『女の一生』だった。ずいぶん時間がかかったし、ちゃんと読めたとはとても言えない。しかし、1冊の本を「征服する」のが大切なのだ[2年次に達成しよう]。「フランス語で本が読める」と自分に言い聞かせることができるし、また人にそう言っても嘘にはならない。

そのうち、フランス語の本を読んで泣いたり笑ったりしはじめる[3年次に達成しよう]。これは大きい。大げさだが「フランス語を学んだおかげで一生退屈せずに済む」と実感したものだ。私は「図書館のネズミ」道を着々と歩んでいたのである。

当時は実存主義の全盛時代。J.-P.サルトルが来日したころだ。私も気負って彼の『嘔吐』を読んだ。この作品には図書館の本を片っ端からアルファベット順に読んでいくという独学者が登場する。私は少年時代の夢を思い出し、独学者がどうなるのか知りたくて夢中で読んだ。結果は悲惨だった。彼は図書館内で忌まわしい行為を犯して、追放されてしまうのだ。私は身震いをして図書館を後にした。

数年後、私はソルボンヌ校舎で学んでいた。時々授業中に大きなネズミが教室を横切った。「そうか、こいつがフランスのネズミか…」以来、ますます図書館を敬遠している。



図書室のロビンソン

文学部教授

岩尾 龍太郎

今から思えば信じがたいが、大学一年のときは変形

五畳半の三人相部屋だった。香川県人会東京学生寮という所である。三田の松平屋敷跡で、浅丘ルリ子が住むマンションよりも高いところから慶応大学を見下ろすのだから、気分は良かったが、ボロ部屋で狭かった。大学から帰ると、相部屋の少林寺拳法部の連中がすでに宴会を始め、一撃で壁をぶちぬいたりしていた。まったく勉強できる部屋ではなかった。寮の図書室へ逃げたが、理科系の勉強が自分に合わないと感じていたのも、あまり予習や復習をした記憶がない。そこには廃品回収に出るような雑本しかなかった。図書室はただ逃げ込むべき場所で、そこで仲間を見つけ、卓球室に移るのが常だった。

三年になるとき文科系に転がり落ちた。四年からオーバードクターにかけての十年間は、庭石屋の物置の二階に下宿した。初めて自分の空間を持ったが、夏は暑く、冬は寒かった。図書館に棲むことを覚えたのはこのときである。朝起きるとすぐ大学図書館へ出かけ、たまの授業と生協食堂と自治会活動のほかは、閉館まで、居眠りしながら『純粹理性批判』を読んでいた。これに比べれば大抵の本はたやすく通読できる。いつしか年間300冊という読書習慣が身についた。図書館には、いつも手を洗う老女や、内ゲバを恐れ逃げ込んだ革マルが棲んでいた。

やがて古本屋廻りにハマリ、関心の赴くままに買込むうち、自分の部屋が図書館のようになっていった。この傾向はほとんどビョーキであり、何故かと考えて、少年時代に原因があると判明した。父が二三年ごとに転勤を繰り返し、常時引越待機のため、私の物といえば、文房具・玩具・本をまとめ、ミカン箱一つ分しかなかった。この欠如感に対する過剰補填が、自分のまわりに本を積み上げると心が落ち着くという情態をもたらしたのだ。

これが判明して買込みのビョーキはやや治ったが、もう置き場所がないというのが実相である。かくて二万冊はあろうか。床も見えないほど平積みの本に囲まれて、いつか圧死するかもしれないが、私は幸福感に包まれている。ちょうどロビンソンが孤島の洞穴の中に籠もり、生き埋めの不安の中の幸福感にしがみついていたように。



経済小説にみる 経済人の生き様

経済学部助教授

小松 秀和

中学・高校時代、日本経済新聞の「私の履歴書」欄を愛読していた私は、経済人の生き様に強い関心をもっていた。それを知る手がかりにしたのが経済小説である。この場を借りて、いくつか紹介しよう。

落合信彦『石油戦争』は、中東の石油利権を巡る攻防を描いているが、その中に国家や石油メジャーを相手に徒手空拳で挑み、自らの利権確保に執念を燃やした男の生涯が語られている。その男の名はカールステ・サルキス・ガルベンキャン（別名、ミスター5%）。

る 図 書 館 活 用 法

中東における石油開発に絡んで巨万の富を築き上げた彼は、複数の愛人を囲み、世界中の高価な美術品を漁った。そんな彼を政商やハイエナとよび、非難することはたやすい。しかし、大国の思惑や革命渦巻く中東で個人の力だけを頼りに大魚をつかんだ彼の姿は、集団の力に頼りがちな日本人の目には鮮烈に映る。

鉄道のターミナル駅に必ずあるもの、それはデパートである。この方式を発明したのは小林一三という人物である。小林は阪急グループの創設者であり、稀代のアイデアマンであった。直筆の『逸翁自叙伝』には、若き日の銀行員時代から鉄道経営に至る経緯などが詳細に綴られている。小林が経済人として優れていたのは、自らの成功を庶民の娯楽や夢に賭けたことである。温泉町の宝塚に少女歌劇団を作るなどは序の口で、狸の住む土地に鉄道を通し、沿線を宅地開発して売り出すという手法まで編み出した。分譲住宅の売り口上で彼は庶民に向かって「自由なる市民」とよびかけ、郊外の自然環境に恵まれた住居が市民たる者にとっていかに相応しいかを説いた。官尊民卑の風潮が残る日本で、小林の商売哲学は今なお輝きを放ち続けている。

渋谷道玄坂にある109。華やかなイメージのその奥に、かつて「強盗慶太」とよばれた男の姿を思い浮かべる人は少ない。大下英治『小説東急王国』には、東急グループを一代で築いた五島慶太の生涯が描かれている。国盗り物語の様相を呈していた関東私鉄沿線拡張戦争、宿敵西武との確執。利権を嗅ぎつけて五島邸に日参する若き日の横井英樹やロッキード事件の国会参考人招致で「記憶にございせん」を連発した小佐野賢治など、一癖も二癖もある人物が登場する。五島慶太の飽くことを知らない事業欲に資本主義の本質が垣間見える。



私の学生時代の 読書体験

法学部教授

神宮 典夫

図書館は自分の書庫である

私は、1966年に、郷里秋田から東京へ上京し、大学生活を始めました。田舎と東京とでは、大きな生活ギャップがあります。とにかく下宿代が高い（そのころマンション住まいのできるのは、まさに経済的なエリートだけでした）。不動産屋をまわり続け、最終的には、大学の紹介する下宿に決めました。家賃15000円。たたみ敷き4畳半一部屋です。エアコンなどあるわけがありません。その下宿で本を読み始めました。その当時、図書館は夜遅くまでは開館していませんでしたので、もっぱら、夜は、下宿で読書です。ほとんど毎日のように神田の古本屋に通い、興味のある本を探して、少しでも価格の安い本を求めて古本屋を回り、本を買いました。本は次第に増えて行きました。4畳半一部屋に収容できる本の数などたかが知れています。すぐに、満杯です。もうこれ以上部屋には置けないと思ったとき、はたと気がついたのです。「図書館は、

わが書庫である」と。それから、私の図書館通いが始まりました。在庫していない書籍については、図書館に頼んでどんどん入れてもらい、読みふけりました。閉館後は、借り出した本を下宿で読み、読み終わった後、誰にもわからないように、その本に自分だけがわかるサインをつけて返却しました。自分がその本を読んだ証です。今でも、その図書館に行けば30年以上前につけた私の印があるでしょう。借りては返し、借りては返し、まさに図書館は、わが書庫となり、小さな下宿が本で足の踏み場もなくなる状態が解消したのです。

喫茶店、電車の中も書斎である。

東大のシェークスピア学者である小田島雄志氏は喫茶店でシェークスピア全集の翻訳を完成したと言われています。読書するとき、静かな環境が必要なのは当然かもしれませんが、私にとっては、リラックスするために、ザワザワした人のうごめきとか、クラシックの音楽なども必要なのです。また、貧乏学生でしたから、冷暖房が完備し、しかもコーヒー杯で何時間もねばれる喫茶店は、書斎としては最高でした。

電車もよく利用しました。特に、日曜日、一冊の本を持って電車に乗るのです。座れることもあれば、つり革につかまることもあります。いずれにしてもひたすら読むのです。行き先は関係ありません。終点まで言ったらまた戻ってきます。東京には、山の手線という便利な電車があって、これは、東京を朝から晩までひたすら廻りつづけます。わたしは、よく、これに乗って、本を読みながら、何周もしました。喫茶店同様、冷暖房完備も魅力でした。快適でしたので、時々、居眠りもしていましたが。

ちなみに私の学生時代は、学生運動のもっとも激しい時代でした。大学は、しばしば学生に封鎖されました。私は、ストライキで封鎖された教室のなかで行われた読書会に参加して、今まで読んだことのなかった多くの書籍を読む機会を得ました。読書体験の異なる人たちとの情報交換も、読書の幅を広げるうえで大切なことです。

乱読のすすめ

中学・高校という最も多感な時代に受験勉強だけに没頭するなど人生の無駄使いである。これが私の考えです。私は、いわゆる「日本・世界・文学全集」なるものは、中学、高校時代にほとんど読んでしまいました。そのころから、私は、本はほとんど乱読です。おそらく、この年になっても、自分の思想が確立せず、迷いが多いからでしょうか。しかし、人生、試行錯誤の連続と私は考えています。人生、良いときもあれば、落ち込むこともある。良い本を読んで満足な気分になれるときもあれば、くだらない本を読んで時間を無駄にしたと思うこともある。それでも、懲りずに乱読をする。なぜなら、私は、「私はこんな本を読む人」と自分で自分を決め付けて、自分を枠にはまった窮屈な人間にしたくないからです。「あ、これはあの先生の好きな本だ」、こういう固定観念を周囲の人に持たれたくないし、私自身、常に、現在進行形で成長して生きたいからです。これからも、私は、図書館から本を借りまくり、喫茶店を使い、電車を使い、バスを使い、銀行・郵便局の待ち時間を使い、はたまた信号待ちの時間を使い、乱読道をひた走るでしょう。

お知らせ

◎ 4月～9月休館日（※8/9・8/16については未定）

4月

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	

5月

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30	31					

6月

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30			

7月

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

8月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

9月

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30		

※夏季休暇中（7/17～8/31）は開館時間が変わります

◎図書館の利用案内について

1階受付カウンターでは、OPAC 端末の操作方法や図書・雑誌などに関するさまざまな質問や問題を解決するための支援を行っています。

◎指定図書（館内閲覧のみ）について

指定図書とは、講義担当の先生が科目に関連のある参考図書を特に指定したものです。開架2階にコーナーを設けていますので利用してください。また、指定図書一覧表を図書館ホームページに掲載していますのでご覧ください。

◎教育実習、卒業論文のための長期貸出

教育実習や卒業論文作成に使用する資料は、通常の貸出とは別に長期の貸出ができますので、1階カウンターでその旨申し出てください。

教育実習用 5冊 45日間

卒業論文用 5冊 30日間

※ゼミ論のための貸出……通常の貸出冊数の範囲内で45日間貸出ができます。

◎喫煙室について

1階・3階に設置しています。喫煙室以外での喫煙を固く禁じます。健康を損なう恐れがありますので吸いすぎに注意しましょう。

◎カラーコピー機（2階）について

2階のコピーコーナーに設置しています。利用を希望される方は1階カウンターに申し込んでください。

【1枚50円】

※授業用は料金を支払う際に申し出てください。

（1枚30円）

◎閉架図書の利用について

図書館には開架に配架されている図書の約3倍の図

書が閉架にあります。この閉架図書が貸出できることを知らない人が意外と多いようです。検索機（OPAC）で調べた図書の所在が「閉架」となっている図書も1階カウンターに申し出て大いに活用してください。

◎夏季休暇貸出の実施について

夏季休暇に伴う長期貸出を実施します。

受付期間 7月2日（金）～8月16日（月）

返却期限 9月3日（金）

貸出冊数 5冊以内

◎盗難に注意しましょう！

図書の取り出しやトイレ等で“ほんのちょっと”席を離れたとき、居眠りしているとき、休憩室や SAINS ルームを利用するために荷物を置いたまま長時間席を離れたとき盗難の恐れがあります。

図書館では盗難防止のため、2階に荷物用のロッカー、1階に貴重品用のロッカーを設置しています。

編集後記

発行部数が約1000部と少なく全学生にいきわたらない本報。1人でも多くの方に親しんでいただくために、前号（155号）をデジタル化して図書館ホームページに掲載しました。本学学生に限らず、卒業生、保護者、受験生、一般の方等多くの方にも本学図書館活動を紹介でき、うれしい限りです。編集サイドでは、これから、今号はもちろん順々にバックナンバーも掲載して、西南学院大学図書館の変遷を Web 上で紹介できればと考えています。（Y. Y）